

一人ではできないから。  
みんなとならできるから。



私はハンターでもあるけど  
動物が好きなんです。  
彼らは悪くないと思ってます。

鳥獣管理士・獣害アドバイザー  
江連 定利 さん

本業の傍ら、鳥獣管理士として県や市から依頼を受け、地域に必要な獣害対策の分析、アドバイスを行っている。射撃場の管理も行っており、野生鳥獣に密接した生活を営んでいる。

鳥獣管理士として

江連さんが鳥獣管理士の資格を取り、本格的な獣害対策を行うようになった背景には「動物が好き」という思いがあります。「『獣害』と言っても、元々の原因は人間にあります。それなのにただ悪者にされて駆除される動物がかわいそうじゃないですか」と優しい顔で話してくれました。

電気柵を設置することで防げる被害も多いのですが、メンテナンスの手間と被害の規模を天秤にかけて、「少しくらい食べられてもいいや」と考えてしまう農家も多いそう。

ハンターは普段、別の仕事をしながら依頼を受けて野生鳥獣の捕獲を行っています。彼らだけに獣害対策を任せるのは不可能です。江連さんは「まずは自分たちにできる対策をしっかりと行い、捕獲ではなく、近づかせないことを第一に考えてほしい」と思いを語ってくれました。

慣れた手つきでくくりわなの使い方を教えてくれる江連さん



- ❶ 一般的なわな猟で使う「くくりわな」。獣がうなる所に設置するのが難しい
- ❷ 江連さんが管理する射撃場。クレ射撃を楽しみつつ、ハンターとしての腕を磨いている
- ❸ クレ射撃で使う弾の薬莖

一人ではなく、みんなで

「今は家庭菜園でさえ被害に遭う時代。必要な対策は地域ごとに違います。どの動物からの被害が多いのか、どこから来てどこに帰るのか、きちんと分析をした上で地域一丸となってやらないと意味がない」と江連さんは言います。

周囲との関係が希薄になっている現代ですが、今こそ「地域ぐるみ」の必要性を見直すときだと言えるでしょう。



鳥獣被害対策実施隊\*

隊員 いちむら 市村 さやか さん

塩原で高原野菜農家を営む。農家として野菜を育てていく中で獣害対策の必要性を感じ、銃猟免許を取得した。息子さんも20歳になったら銃猟免許を取得予定。親子3人で山に入るのが今から楽しみ。

隊員 そえだ まゆみ 添田 真由美 さん

父と兄に連れられて間近で<sup>りょう</sup> 猟を見たこと、その時に山の頂上から見た景色が悩みを吹き飛ばしてくれたことがきっかけでハンターになることを決意。狩猟期間は毎週日曜に仲間たちと猟に出向いている。

※鳥獣被害対策実施隊：野生鳥獣による農作物被害に対して、より効果的で実践的な対策を行うために発足。ハンターの知識を元に、被害調査・対策指導などを行う。

狩猟をすること。  
命と向き合うこと。

猟に出るようになって世界が広がったんです。  
みんなと喜びを分かち合える、それが楽しい。

仲間と山に入り、役割分担をしながら狩猟を行っている



女性ハンターとして  
ハンターという男性ばかりのイメージですが、実は年々女性の割合が増えています。家族や友人の誘いで興味を持ち、多くの女性が狩猟の世界に足を踏み入れています。  
「女性だからといって狩猟が難しいということはないですよ」。そう語る市村さん。「私が狩猟を始めた頃は、みんなそんなに銃の扱いも上手じゃなかった」と、数年前を振り返ります。「男性ばかりじゃなくて、女性もいるとより楽しいんですよ。新しい人が入ることで、やる気も出るし上達もする」という市村さんは、今ではクレー射撃の大会で上位に入るほどの腕前。  
市村さんは「動物と話ができて」ここまで餌として食べていいよ」って言えたらいいんですけどね」と笑いながらも、地域の被害を少しでも減らすために毎日奮闘しています。



猟の時に身に着ける衣服と携行ナイフ。カラスのような頭のいい動物はオレンジ色をただけで警戒するそう

狩猟免許を持つということ  
「免許を持っていない人には、とにかく取った方がいいよと伝えたい」と添田さんは言います。  
「獲物が現れるのをじっと動かさず何時間も待っている間、自分の心臓の音がドクドク聞こえるんです。そのくらい、命のやり取りをするのは緊張する」と、狩猟への熱い思いを話してくれました。  
父と兄の影響で狩猟のとりこになった添田さん。経験豊富な先輩たちに教わり、それをまた後輩たちに伝えていくこと。命に感謝をしながら、狩猟した動物たちのお肉を食べる栄養にすること。狩猟には、そんな「命のリレー」の大切さが詰まっているのかもしれない。